

同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と石丸文雄教授と宮澤賢治（15）

若尾 紀夫（C昭39・院41）

『（略）石丸さんが死にました。あの人は先生のうちでは一番すきな人でした。ある日の午後私は椅子によりました。ふと心が高い方へ行きました。錫色の虚空のなかに巨きな巨きな人が横はってゐます。その人のからだは親切と静な愛とでできてゐました。私は非常にきもちがよく眼をひらいて考へて見ましたが寝てゐた人は誰かどうもわかりませんでした。次の日の新聞に石丸さんが死んだと書いてありました。私は母にその日「今日は不思議な人に遭った。」と話してゐましたので母は気味が悪がり父はそんな怪しい話をするなど、云つてゐました。石丸博士も保阪さんもみな私のなかに明滅する。みんなみんな私の中に事件が起る。（略）』

これは賢治が東京にいる親友保阪嘉内に宛てた手紙（書簡153）（9）で、この中で賢治が「石丸さん」と呼んだのは、盛岡高等農林学校・林学科の石丸文雄教授のことである。「あの人は先生のうちでは一番すきな人でした。」という文面から、賢治は石丸教授に対して好感を持っていたことを伺い知ることができる。このように賢治が石丸先生個人に対する感情をストレートに表現しているのには驚かされる。

賢治が「一番すきな人」という「石丸さん」とはどのような人物で、賢治と石丸さんとはどのような関係であったのか、手紙にある賢治の夢見（幻想）はどのような意味があるのかなど、色々な疑問をおぼえる。

石丸文雄教授の履歴

石丸文雄教授（明治4年4月8日～大正8年8月2日）は福井県福井市老松上町で誕生、東京帝国大学農科大学林学科で勉学（林学士）し、卒業（明治29年7月10日）後は、林務官として青森・岡山・鳥取・大阪・東京の大林区で勤務していた。石丸教授は東京帝国大学卒業の年に、当時の世相を反映してか一年志願兵として歩兵十五連隊に入営（明治29年

11月13日）、陸軍歩兵少尉（明治32年2月28日）となる。

明治36年3月3日、盛岡高等農林学校創立と同時に林学教授として赴任し、数学・森林経理・森林土木及同実習・森林利用及同実習・独語などの科目を担当した。石丸教授は、盛岡高農では最古の教授の一人で、同時期には獣医学科の可児岩吉教授も就任、その後、佐藤義長教授（後の第2代校長）（明治36年3月11日）及び大森順造教授・山田玄太郎教授（明治37年4月21日）が着任している。

当時多くの教授達が次々と外国留学に出かけたが、石丸教授も、明治39年10月2日より3年間、森林利用及森林土木学研究のため、独逸（チューリンゲン州のアイゼナハEisenach及びウィーンWien）へ留学した。石丸教授の留学に際して、琴花（ペンネーム・実名不詳）の名前で書かれた「石丸先生の洋行を送る」という寄稿がみられる（校友会報 第2号：明治40年6月22日）。このような格調高い歓送文は校友会報には珍しく、石丸教授の人望を物語るものであろう。

「石丸先生の洋行を送る（琴花）」

あゝ我石丸師
教への業に力をあつめ
しばしだにいこふ時なく
つかのまもやすらふ間なく
年久につとめはげみて
その学殖のいよ、深きを
いやましにたれりともせず
外国のまなびのはやし
またさらにさらに明んと
さにつらふ紅葉のにしき
朝な夕な色はねるとき
からにしき身にそへむとや
あらしほの檻の八百路の
わたの外の遠き國邊に
いそしくも出立つけふは
あゝ我師はも世のまれ人

げに君はも時のますらを
只いのらん我師の行手に
幸多かれとあゝさち多かれと

外国留学から帰校（明治43年5月10日）した石丸教授（写真1）は、直ちに林学部長（明治43年5月31日～大正8年8月）に就任した。石丸教授は高農に着任以来、林学の担当講義は勿論のこと、林学部長や附属演習林長・生徒監など多くの校務において重責を担い、更に東北帝国大学農科大学（後の北海道帝国大学農科大学）非常勤講師としても林学授業を担当した。

石丸教授は賢治が農学科第2部へ入学した時の生徒入学試験委員（石丸教授他7名）（大正4年3月16日）を勤めたので、賢治の面接官（口頭諮問官）であった。石丸教授は大正8年7月28日に林学博士の学位を受けたが、それは石丸教授が亡くなる僅か5日前であった。



写真1 外国留学帰校（明治43年5月10日）直後の石丸文雄教授

石丸文雄教授の研究等の業績

石丸教授は盛岡高農在任中、多くの論文や専門書を著述している。亡くなった時は、大著「森林土木工学全書」の執筆途中であったといわれる。

- ・ 独逸の学生に就て（学芸部会講演）：校友会報 第9号（明治43年7月20日）
- ・ 洪水防遏の一策：校友会報 第10号（明治43年11月25日）
- ・ 木材転送に関する力学的論究（未完）：校友会報 第13号（明治44年7月18日）
- ・ 木材滑走に関する力学的論究（承前）：校友会報 第14号（明治44年11月25日）

- ・ 木材滑走に関する力学的論究（承前）：校友会報 第15号（明治45年3月14日）
- ・ 自動的可動堰に就て圖算法を解す：校友会報 第20号（大正2年6月15日）
- ・ 南洋視察談（学芸部会講演）：校友会報 第27号（大正4年5月27日）
- ・ 水源の涵養：校友会報 第37号（大正7年12月10日）
- ・ 土木応用力学：石丸文雄、丸善（大正元年）
- ・ 森林土木工学全書：石丸文雄、丸善
第1巻：材料学編（大正2年）
第2巻：木工、積木、土工、地形編（大正3年）
第3巻：林道、橋梁及森林鉄道編（大正5年）
第4巻：運材及貯木編（大正7年）
- ・ 南洋占領地視察報告書：石丸文雄、南洋庁編（昭和2年）

石丸文雄教授の死去

石丸教授（写真2）は、明治45年以来病氣勝ちで病の床に臥すことが多かったといわれ、不幸にも大正8年8月2日に病死された。どのような病氣かは定かではないが直接の死亡病名は肋膜炎。享年49歳、高農在職16年。

石丸教授の死を悼み、直弟子の三浦二郎教授（母校林学科第1回生）（写真3）が「噫恩師石丸先生」「八月二日夜先生の御棺側に侍して三浦生」という弔文を書いている（校友会報 第39号：大正8年8月14日）。三浦二郎教授は賢治が入学した時の面接官で、賢治は同教授の指導で仏教会（同教授は会長）に入り座禪に参加したといわれる。この弔文は石丸教授を知る貴重な資料であり全文を掲載する。
「噫恩師石丸先生」



写真2 石丸文雄教授（林学部長）（大正6年3月）



写真3 三浦第二郎助教授（大正8年教授）
（大正6年3月）

突然一大悲報を皆様へ御伝へせざるべからざるに至れるは洵に哀愁の極みでございます。夫れは日頃私共の最も敬慕致して居りました先生の御逝去遊ばされた事であります。御承知の通り先生は四五年以来御健康を傷はれまして時に盛岡の御自邸に或は札幌の客舎に重き病の床につかされられたのであります。また近年夏の休暇には東京にて専ら治療に努められたこともあるのです。御體がかくの如き有様ででありましたのに一方森林土木工学全書の御著述に森林利用の大御研究に不断孜々倦ませられずその上学校の御講義卒業生の御周旋林学部長としての御務など実に申上様なき御多忙の御上であらせられたのであります。私共も見かねて時に御静養を御勧めした位であります。今になって先生の思召を恐察致しますと所謂斃れて後已むの強いご決心であらせられたので御座います。昨秋より本年にかけて猖獗を極めた感冒にも罹らせられず欣んで居りましたのに得業式もすみ入学試験も始まるふとする三月二十二日急に病の人となりました。初めは肺炎との診断でしたが漸次御容態重くなり肋膜炎と変じ越えて四月十八日には岩手病院に入られ翌十九日には切開手術をうけせらるゝことになりました。国手も先生の御悩の決して軽からざる旨を告げ予後の急変を案してゐたのです。私も其日来盛の御老母様と御奥様の御頼みで唯一人先生の手術室に立会ふ必要があった位であります。しかるにそれも経過良くすみ最も気づかざる、其後の三昼夜も過ぎ死を期して居られた先生は申す迄もなく皆様の御喜びは非常なるものでありまして私もこんな嬉しいことはなかったのです。そうして百花開く春の日を病室に過され五月半葉にはそろそろ歩かせらるゝやうになりその月末に御退院遊したる時には先生のため実に万歳を叫んだのであります。六月中旬林学博士会員の熟誠ある推薦を受けら

れたのは皆様のよく御承知の所であります。新嶋博士が博士会御出席の帰途態々先生の御宅へ立寄られた際は先生も大そう御元気でいらせられました。後は唯御転地なされて御体力を増すばかりのこと、なったのです。七月二十日頃全快の御通知をかねて御礼状を皆様にさし出されたるはいかばかり私共が慶し上げたことでありませう。二十三日には先年来避暑せられ風光をめでさせられた浅虫へ御家族皆様と共に行かれたる折は先生は全く健やかな御方でありました。しかるに何事ぞや私が滝沢演習林へ出張中の八月の一日に先生自ら御認めの危篤の御急報に接した時は夢かとばかり驚きました。瀧澤から急行して浅虫へ参つた時はもはや先生は永へに帰らぬ旅に出でました後でありました噫悲みの極み、

八月二日夜先生の御棺側に侍して三浦生

尚皆様に申上度き先生の御事ども委しくは更らに筆を改めて御知らせ致したいと思ひます。今は忙然自失想ひ出もあとやさきたゞ涙あるのみであります。

石丸文雄教授の死去を報じた岩手日報

現職にあった石丸教授、その死去は当時の岩手日報に大きく取り上げられている。記事の見出し（写真4）は、石丸教授の盛岡高農での人望と業績を示している。

「自己の名利より 学校の利害を先に
大学教授に望まれしも
名聞に淡い博士は動かなかつた
森林土木の著述中に逝ける
石丸博士の逸話」

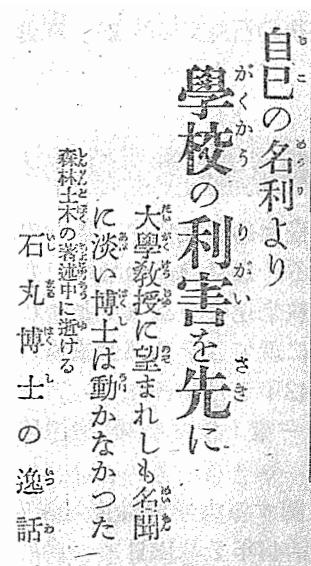


写真4 石丸文雄教授の死亡記事
岩手日報（大正8年8月3日朝刊）

浅虫温泉の客舎に療養中病俄に革まりて、当市鷹匠小路の自宅に帰り竟に逝去せる高農教授石丸林学博士邸を訪へば、三浦高農教授と二令弟が応接し悲愁の面貌にて肅やかに語る。

『博士の臨終は洵に立派で少しも取乱した色なく意識が明晰な中に左様ならの一語を残して溘焉と息を引き取つた。之は予て死を期し覚悟をして居たのであろうが、博士は目下森林土木全書の著述中で外に未だ完結しない研究もあるから、深く心情を察すると今此の世を去られたのは学者として至極遺憾であつたらうと思ふ。

博士は福井県福井市の出身、明治二十九年に東大の林学科を卒業してから青森岡山鳥取東京の各地で林務官を歴任し、高農には三十六年創立と共に就職（注：明治36年3月3日）し今日まで一意教育事業に尽し、傍ら専門である森林土木の研究を続けて居た一年志願の歩兵少尉であるから日露戦役には準備したけれども教授であつた為招集免除となり越えて三十九年に独逸国に留学を命ぜられた。

研究科目は森林利用と土木学とでアノゼノハ、ウインナの両地で三年間研究し帰朝後も高農の林科主任として育英に应つて居たのである。性は名利に淡い学者肌の人で、嘗て北海道大学から教授に希望し来たり佐藤大学総長（注：花巻出身の佐藤昌介：北海道帝国大学初代総長・農学博士）なども切に勧めたけれども、高農の為めを思つて竟に動かずに了つた。

若し大学教授に就任したなら早く博士号も授与され一身上の名聞は此上もないが、博士は自己の名利よりも学校の利益を先にしたのである。しかし大多数の同情にて博士に推薦されたから幾分慰めともなり又其勞に酬えられた事と思ふ。病気を発したのは本年の三月頃で、肋膜炎であつたが、経過がよくなかつた為めに四月十九日手術を施し一時は床を上げて出勤講義する迄になつた。其後七月中旬頃より病再発したので浅虫温泉で静かに療養して居たが竟に一昨日逝去して了つた。享年四十九である云々』

葬儀は明四日願教寺にて：故林学博士石丸文雄氏の葬儀は明四日午前九時自宅出棺、途中葬列を廢して北山願教寺にて仏葬を営み、直ちて茶毘に附したる上遺骨は郷里の菩提寺に斂むる筈

石丸文雄教授を詠った短歌「石丸博士を悼む」

さりげなくいたみをおさへ立ちませる

そのみすがたのおもほゆるかも

賢治がこの短歌を詠んだのは「大正8年8月以降」(3)となっており、具体的な日付は不明である。賢

治は岩手日報(大正8年8月3日朝刊)で石丸教授の死去を知り、直ぐに保阪嘉内に手紙(大正8年8月上旬)(9)を書いたものと思われるので、恐らく短歌を詠んだのもほぼ同じ頃ではないか。

農学科及びその後の農学科第1部(大正2年4月：農学科は第1部・第2部となる)では「林学大意」が必修科目となっていた。明治42年以前の担当講師は不明であるが、その後は小泉多三郎助教授が継続して担当していた。因みに小泉多三郎助教授は、後に賢治と稗貫郡土性調査(大正7年5月～9月)を受け持つことになる。ところが、賢治が在籍(大正4年4月～7年3月)した農学科第2部(後の農芸化学科)のカリキュラムには林学科目はないので、賢治が石丸教授を含め林学の講義を聴くことはなかった。従って保阪嘉内宛ての手紙の備考欄(10)に「賢治たちは林学大意を聴講」とあるが、それは間違いである。

では何故賢治は石丸教授のことを詠ったのであろうか。賢治が保阪嘉内に宛てた手紙(9)で「あの人は先生のうちでは一番すきな人でした。」と述べていることから、賢治と石丸教授とは個人的に親交があつたのであろうか。学科が異なり石丸教授の講義を受けることはなかったが、同じキャンパスにいて両人が日常的に接することはあり、賢治が「(手紙で)その人のからだは親切と静な愛とでできていた。」とよんだ石丸教授の学識や人柄に惹かれ、深く敬愛していたのではないか。

先に述べた三浦第二郎教授の弔文に「先生は四五年来御健康を傷はれまして時に盛岡の御自邸に或は札幌の客舎に重き病の床につかせられ、また近年夏の休暇には東京にて専ら治療に努められた。」とあることから、石丸教授は病氣勝ちであつたことは確かである。賢治は在学中、石丸教授が病の痛みをさりげなく抑えて教壇に立ち講義をしている姿を目にしたのであろうか。不幸にも教授は在職中(大正8年8月2日)に若くして逝去、その訃報に接した賢治は悲しみのなかでこの短歌を詠ったのであろう。

保阪嘉内宛て手紙(書簡153)

冒頭で示した保阪嘉内宛て手紙は、大正8年8月上旬(少なくとも8月3日以降)に書かれたものである。その当時、賢治は身分上は高農研究科に在籍(大正7年4月～大正9年5月)中で、前年の稗貫郡土性調査も無事終了し一時期上京していたが、花巻の実家で好きではない家業(質屋兼古着屋)の店番をしていた。この手紙は具体的な日付を考慮する

と次のようになる。

『(略) ある日(8月2日)の午後、賢治は椅子に寄り掛かりうとうとしていると心が高いところに上って行き、見下ろすとスズ色の空に親切と静な愛に満ちた大きな人が横はっていた。目を覚まして考えたが寝ている人が誰か分からなかった。次の日(8月3日)の新聞(岩手日報・朝刊)で石丸さんが死んだこと(8月2日・死去)を知った。賢治は前の日(8月2日・午後)に母親に「今日是不思議な人に遭った。」と話したので、母親は気味悪がり、また父親はそんな怪しい話をするなど叱った。石丸さんも保阪さんも、賢治の心の中に“現れては消え”“消えては現れ”、さまざまな事件が起こるのだ。』

賢治は心(夢)の中で亡くなった石丸先生らしい人と交流したが、それは暗く気味悪いものではなく「むしろ非常にきもちがよい」ものであったと感じている。このように敬愛する石丸先生が死の間際に賢治の夢枕に現れ、正夢になった。その霊的体験を親友である保阪嘉内に手紙で率直に知らせたのだ。

不思議なことに、賢治は人間も含め自然界のさまざまなものと交流する「鋭敏な靈感」を持っていた(12, 13)。保阪嘉内宛てのこの短い手紙も賢治の特異な霊的資質を示唆している。それを示す作品や言い伝えは多数みられ、例えば「銀河鉄道の夜」(7)では、登場人物たちが「現実から幻想へ・幻想から現実へ」と時空を飛び越えて往来し誰もが発想しない不思議な世界が描かれている。

全ては現象であり明滅し流転する

最愛の妹トシ(大正11年11月27日)を失った賢治は、農学校の生徒に「僕は妹のとし子が亡くなってから、いつも妹を思ってやすむ前には必ず読経し、ずっと仏壇のそばに寝起きしているのだが、この間もいつものように一心に御経を読んでからやすむと、枕辺にとし子の姿がありありと現れたのですぐ起きてまた御経を上げていると見えなくなった。次の晩もやはり姿が見え、二晩だけであとは見えなくなった。人間というものは人にもよるかも知れないが、死んでからまた別の姿になってどこかに生をうけるものらしい。」と語っている(1)。

またある時、「僕がチャイコフスキー作曲の交響曲をレコードで聞いていた時、その音楽の中から“私はモスコ音楽院の講師であります”と言うことばをはっきり聞きました。そこですぐに音楽百科事典を調べてみたら、その作曲の年はやはり、チャイコフスキーがその職にあった年だったのです。」といっ

ている(1)。

「賢治さんは、優れた官能の鋭敏さと、稀に見る官能間の融通性とをもっておりました。目で見たまのは耳から聞いたように、耳からきいたことは、目で見たまのように、自由に感じ得られる人でありました。ですから色を見ましては、感情となったり、形となったり、音楽となったりしますし、形を見ましては、色となったり、音となったりし、音を聞いては色とか形を思い浮かべ、それが叙情の詩となる人でありました。」(1)

このように賢治は、他人には聞こえない音を聞き、見えないものを見るなど、さまざまな特異な幻想感覚を持っていた(11, 12)。賢治の心は、時空を飛び越えて彼岸の人と交流し、現空間(正覚)と異空間(幻覚)の間を行き交うことができた。それは、眼に見えないエアーカーテンで仕切られた時空を“ドラエモン”のように自由に往来するような“四次元感覚(三次元物理世界と一次元時間世界)(13)”である。

「(略) みんな流転ではありませんか。速かに速かに複雑に何等の法則を容れる余地もなく、或は明るく時には暗くこの万法の流転よ。わが明滅よ。(略)」これは保阪嘉内宛ての手紙(書簡83a)で、賢治は人間も含め宇宙の全ては速やかに複雑に明滅し流転していると考えていた(8)。

われやがて死なん

今日又は明日

あたらしくまたわれとは何かと考へる

われとは畢竟法則の外の何でもない

からだは骨や血や肉や

それらは結局さまざまの分子で

幾十種かの原子の結合

原子は結局真空の一体

外界もまたしかり

われわが身と外界とをしかく感じ

それらの物質諸種に働く

その法則をわれと云ふ

われ死して真空に帰するや

ふたゝびわれを感ずるや

ともにそこにあるのは一の法則のみ(略)

これは「疾中」詩(1929年2月)である(2, 5)。137億年前に真空の極超微小粒子が爆発(ビッグバン)して宇宙が誕生し、さまざまな物質粒子が発生した。その宇宙は現在でも超高速で膨張を続けている。宇宙の中の銀河系。その端に位置する太陽系。その中の無数の星のひとつ地球。ビッグバンで発生したさまざまな元素—それらの原子(素粒子)—は

宇宙空間をシャワーのように飛び交っている。全ての具象は、宇宙空間を飛び交う原子から成り立つが、それは刹那の存在であり、速やかに原子に崩壊し宇宙空間に飛び散る。それらは再び風となり雲となり水となり土となり、そして生命となる。このように、賢治はわれとは畢竟一つの法則(因縁)であるという。

賢治は自分も含め宇宙の全ては“具象(実体)”ではなく単なる“現象”にすぎず、せわしく明滅するひとつの“できごと”であり“仮定”であるという(心象スケッチ：春と修羅(4))。

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにとりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたちち その電燈は失はれ)(略)

「千の風になって」(作詞 不詳/日本語詞と作曲 新井 満)という歌がある。

私のお墓の前で 泣かないでください

そこに私はいません 眠ってなんかいません

千の風に 千の風になって

あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ

冬はダイヤのように きらめく雪になる

朝は鳥になって あなたを目覚めさせる

夜は星になって あなたを見守る (略)

この歌によって多くの人が癒やされ慰められる。筆者もその一人である。「愛する人が亡くなった時は、悲しみで一杯です。でもお墓の前で泣かないでください。愛する人の心は、明滅しながらあなたの回りを風のように吹き渡っています。秋には光・冬には雪・朝には鳥・夜には星になって、あなたを温かく見守っています。愛する人はいつもあなたの近くにいます。」

賢治はいつている。「いゝえ私はどこへも行きません。いつまでもあなたのことを考へてゐます。すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすむ人は、いつでもいっしょに行くのです。いつまでもほろびるといふことはありません。(略)」(6)「千の風になって」の歌には、このような賢治の想いに相通じるものがあるように思う。

今回は、盛岡高農林学科の石丸文雄教授の履歴や業績、死亡に際しての弔文や新聞報道記事などについて述べた。更に賢治が保阪嘉内に宛てた「石丸教授の死を予知し、心の交流を体験した旨の手紙」を取り上げ、賢治の不思議な霊的資質について言及した。

本稿をまとめるに当たり、貴重な資料を提供して頂いた工藤 朗氏に感謝いたします。

参考資料

- 1) 宮沢賢治：佐藤隆房、富山房、97、98、299 (昭和17年9月)
- 2) 年賦 宮澤賢治伝：堀尾青史、中公文庫 (平成3年2月)
- 3) 新校本宮澤賢治全集 第1巻 本文編：筑摩書房、93 (平成8年3月)
- 4) 新校本宮澤賢治全集 第2巻 本文篇：筑摩書房、7 (平成7年7月)
- 5) 新校本宮澤賢治全集 第5巻 本文編：筑摩書房、176 (平成7年8月)
- 6) 新校本宮澤賢治全集 第8巻 本文編：筑摩書房、111-114 (平成7年5月)
- 7) 新校本宮澤賢治全集 第11巻 本文編：筑摩書房、123-177 (平成8年1月)
- 8) 新校本宮澤賢治全集 第15巻 本文編：筑摩書房、101 (平成7年12月)
- 9) 新校本宮澤賢治全集 第15巻 本文編：筑摩書房、174 (平成7年12月)
- 10) 新校本宮澤賢治全集 第15巻 校異編：筑摩書房、85 (平成7年12月)
- 11) 宮沢賢治 美しい幻想感覚の世界：板谷栄城、でくのぼう出版 (平成12年11月)
- 12) 宮沢賢治のちから：山下聖美、新潮新書 (平成20年9月)
- 13) 科学者としての宮沢賢治：斉藤文一、平凡社 (平成22年7月)